２００５年９月２０日（火）

東海の古代

第　６５号　編集・発行　古田史学の会・東海

代表 林 俊彦 〒461-0025 名古屋市東区徳川 1-729
メール frttokai@zm.commufa.jp
電話/FAX 052(936)5012
郵便振替 00870-5-30752

古田先生は来年８月で８０歳になられます。率直に言って、もう名古屋で講演会を実施する可能性は今後ほとんどないと思われます。

今度京都で行われる古田武彦講演会は先生の声と姿にじかにふれることのできる貴重な機会となります。ぜひ多数の方のご参加を願います。

古田武彦講演会
新東方史学会立ち上げ・京都

聴講者より抽選で５名に、古田先生の親鸞三部作を進呈！古田武彦著作集より、第一巻「人と思想」「第二巻親鸞思想」「第三巻わたしひとりの親鸞」（明石書店）合計三冊（計２４１００円＋税相当）で一人分です（当日は抽選のみ、本は後日発送）。

期日：９月２４日（土）午後１時半～４時半
場所：京都市南区　アバンティ・ホール（９階）
（ＪＲ京都駅の南側）
電話０７５－６７１－８１８８
演題：「本気で問う－歴史を打ち破る」
内容：１「真実無罪」－日中朝韓の青年に問う
２「女王新発見」－日本列島の倭人伝
３「中国亡命」－井真成墓誌《その後》
４「靖国を問う」－火中の栗を拾う
資料代：２０００円、学生は無料
主催：新東方史学会
協賛：古田史学の会
問合せ先：水野孝夫（0742-44-1805）

伊勢神宮見学会挙行

8 月 12 日、東海の会有志で伊勢に行ってきました。記紀神話の神々の総本山でありながら、今や観光名所と化した伊勢神宮ですが、その隅々に記紀とは無縁な土着の神々が棲息していました。伊勢國一の宮は鈴鹿市の椿大神社だったことも知りませんでした。かえって謎の深まる伊勢神宮ではありました。

もちろん二見が浦の夫婦岩も見てきました。修学旅行以来の久しぶりの再会でしたが、１）岩礁群の中から任意に二個選ばれたに過ぎない印象であること、２）思ったより小さかったこと等から、福岡県は糸島半島の夫婦岩のほうが、むしろ本家ではないかとさえ見えました。

今後、文献史学、考古学、民俗学など多方面から例会でも伊勢神宮に取り組んでいきます。

時に天照大神、倭姫命に誨へて曰はく、「是の神風の伊勢國は、常世の浪の重浪歸する國なり。傍國の可怜し國なり。是の國に居らむと欲ふ」とのたまふ。故、大神の教えの随に、其の祠を伊勢国に立てたまふ。因りて斎宮を五十鈴の川上に興つ。是を磯宮と謂ふ。則ち天照大神の始めて天より降ります處なり。（垂仁紀二十五年）

日本書紀のこの記述こそ三重県伊勢市にあるのは本当の伊勢神宮か、という疑惑の根源です。

「常世の浪の重浪歸する」とは常世の神話が繰り返し語られる地という意味ではありませんか。スクナヒコナがそこから現れ、そこへ去っていったのが常世です。タジマモリがトキジクの木の実を取りに行き、帰ってきたのが常世です。決して漠然と南方の楽園を指す想像上の地ではありません。困難ではあるが、往来可能な地であり、その説話の繰り返し語られたのは本来、博多湾岸であったはずです。三重県にどんな常世説話があるのでしょう。また「天照大神の始めて天より降ります處」も博多湾岸のはずです。天照大神は九州王朝の最高神でもあります。九州に伊勢神宮があって何の不思議もありません。

是に、神宮に献れる蝦夷等、晝夜喧り譁きて、出入禮無し。時に倭姫命の曰はく、「是の蝦夷等は、神宮に近くべからず」とのたまふ。則ち朝廷に進上げたまふ。仍りて御諸山の傍に安置はしむ。未だ幾時を経ずして、悉に神山の樹を伐りて、隣里に叫び呼ひて、人民を脅す。天皇聞しめして、群卿に詔して曰はく、「其の、神山の傍に置らしむる蝦夷は、是本より獣しき心有りて、中國に住ましめ難し。故其の情の願の随に、邦畿之外に班らしめよ」とのたまふ。是今、播磨・讃岐・伊豫・安藝・阿波、凡て五國の佐伯部の祖なり。（景行紀五十一年）

有名な一節です。ヤマトタケルの連れてきた蝦夷が騒いで扱いに困り、「其の情の願の随に」させたら中国四国地方一帯に住んだという説話で、後半の「佐伯部の祖」の部分は通説でも史実性が高いとされています。しかしそうすると地理的には奇妙な記述になります。そこで古田先生は、後半を別な時代のこととして切り離します。そして前半の「神宮」を鹿島神宮とし、「中國」を関東に求め、関東王朝説に発展させてみえること、皆さんも周知のことでしょう。

しかし「愛彌詩を一人百な人、人は云へども抵抗もせず」の歌にもあるように、エミシは九州にもいたことは、古田先生も指摘するところです。伊勢神宮は実は九州にあったとすれば、まったく平易にこの説話も理解できます。

天武天皇

朱雀三年。九月廿日。依左大臣宣奉勅。伊勢二所太神宮御神宝物等於。差勅使被奉送畢。色目不記。宣旨状爾。二所太神宮之御遷宮事。廿年一度応奉令遷御。立為長例也云々。（太神宮諸雑事記第一）

２０年に一度の式年遷宮の開始時期を示唆するのが内宮の古文書「太神宮諸雑事記」のこの一節です。通説も数々の不審を感じながらこれに注目しています。天武天皇条に入れているが、朱雀は朱鳥の間違いだ。だから朱雀３年は持統２年(688)だ。この時期、右大臣は(左大臣も)いないがその程度の矛盾は無視してよい、と通説では考えます。

持統女帝皇

即位四年。庚寅太神宮御遷宮。（太神宮諸雑事記第一）

とあるから造営開始の二年後に太神宮の遷宮が行われたのだろう、と通説は考えます。

しかし朱雀は九州年号です。大和王朝にいないはずの高官が九州年号を使った命令を残しているのです。式年遷宮は九州王朝が始めたことを示す証拠でなくて何でしょう。なお「朱雀」は「ニ中歴」では二年までしかありません。翌年は次の「朱鳥」になります。これは朱雀三年の途中で朱鳥と改元されたと考えれば問題ありません。むしろ、後代にそれらしく偽造された文書ならば「朱雀三年」などとはしないはずであり、当年に正しく記録された記事であると保障するものでしょう。

伊勢神宮は九州王朝の成立のかなり初期から七世紀の末頃まで九州にありました。

１０月例会に参加を

日程：１０月１０日(月)午後１時～4 時半
場所：名古屋市公会堂第３集会室（２階）
参加費：500 円(維持会員は無料)

今後の予定

１１月例会：１１月６日(日)
１２月例会：１２月１８日(日)

例会は原則として毎月第２日曜日ですが、会場の都合等により変則的になる場合があります。日程をよく確認しお出かけください。特に今回に限り月曜日に開催します。ご注意ください。また１１月は会場が第２集会室になります。

参加費は五百円(維持会員は無料)。古田先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。